

# 大陸（朝鮮）

幹候受験をしなかった

虎兵团入隊兵

東京都 林 慶治

私は、生まれは旧四ツ谷区花園町で、そこで成長し、昭和十六（一九四一）年八月から横須賀海軍工廠造兵部・水雷工場の操舵機工場にて精密機器の作業に従事していました。応召により昭和十九年三月一日に北朝鮮第十九師団の個有部隊号の輜重兵<sup>しちゆうへい</sup>第十九連隊（通称部隊号は虎八五二三部隊）与田部第一中隊に入隊しました。

小田原市内の城内小学校に集合して身体検査のう

え、各中隊ごとに配属が決まりました。各隊ごとの責任受領委員の下士官の指示に従って、三月三日午後五時、小田原駅にて兵隊専用の列車に乗車、出発しました。何と下関までの時間調整のために呉線や柳井線で遠回りして、三月四日深夜、門司港に到着、接岸していた船に乗船し、三月五日午前八時ごろ下関発、夕方四時ごろ釜山港に到着、船内で仮泊をしました。

三月六日早朝、釜山駅を列車で出発して、途中大田駅で昼食弁当の給与を受け、さらに午後五時ごろ、京城市の西方で新義州方面と元山方面に分かれる三叉路の龍山駅で大休止となり、夜食用の食事をしました。夜中、朝鮮半島の中部山地を通過しました。三月七日、咸鏡南道の首府戌興市付近から吹雪となり、咸津

駅では積雪のために列車が四時間止まりました。やがて発車しましたが、速度が遅くて目的地の威鏡北進鏡城駅に到着したのは夜十一時三十分でした。

全員下車をしてマイナス一五度くらいの凍結をした雪中を約三十分歩いて営門を入り、各中隊ごとに割り当てられた兵舎の中に入りました。舎内は暖房用のベチカが燃えており、暖気と馬糞の匂いには驚きました。

内務班長と教育係になる古参兵が迎え入れてくれましたが、他は全員就寝中でした。各自割り当てられた寝具の藁布団の上には八枚の毛布が巻いてあり、その中で一週間ぶりに眠りました。

翌八日、午前九時に起床して全員身上調査と身体検査、学歴簿持参者は書類を提出せよと命令を受けました。私は兵役を早く終了して除隊したいと思いましたが、一般の兵隊として輜重兵の馬取扱兵として三ヶ月の訓練を受け、後は中隊全員の被服係を命ぜられました。

昭和十九年十一月二十三日、師団に対し南方戦域への動員令が下命されました。これは大陸甲編成の命令でしたので、これは第一線の戦闘部隊の編成ではないかと思いました。

我々が南方移動をした後に、対ソ連の国境防衛軍は手薄となり、このため簡単に侵略を受けるのではないかと不安になりながらも、私は羅南の師団司令部の前に所在をする歩兵第七十三連隊（虎八五〇二部隊）の第三大隊本部付の騎馬隊の弾薬班員として転属になりました。出発までの八日間は、夜寝る時間もなく戦闘準備に追われ通しました。

十二月一日早朝、雪中に馬を引いて、歩兵第七十三連隊総員三千二百人は貨物列車を利用して釜山鎮駅に向かい出発しました。翌日午後二時ごろに釜山鎮埠頭に到着し、岸壁に横付けされた「日向丸」に第一大隊から乗船開始を行っているうちに、落下傘部隊が先に乗船をするので、私たちの所属する第三大隊の兵員二十四人と馬八十二頭は後に残されました。そしてこれによって後発の第二挺団の船に乗船することとな

り、それまでこの釜山市郊外にある古い競馬場の跡の  
厩まで行軍して、そこに待機せよとの命令がありました。  
た。

入隊以来八カ月と二十三日目の私たち三人が最古参  
兵となり、入隊をしたばかりの新兵に馬の取り扱い方  
を教育しながら、新兵と三十歳を越した補充召集兵五  
人で馬を急速に移動することになりました。寒風荒ぶ  
埠頭の広場に馬を繋ぎ、夏服の上に外套を着用して一  
晩は過ごしました。翌日三千メートルぐらい離れた元  
の競馬場の厩舎まで四往復して夕方までに移送を終了  
しました。

その後、新兵が高熱で寝込んでしまいました。やむ  
を得ず私が代表となり、五キロくらい離れた所に通過  
部隊用の輸送司令部があると教えられましたので、裸  
馬に一本手綱で乗馬し、市内電車の走る道路を走り、  
夜間に司令部を訪問し受付で実情を申告致しますと、  
釜山市の陸軍病院に入院手続きの連絡と申込み用紙を  
渡されました。病院の所在地を教えてもらい、また乗

馬で宿舎に戻り、付添いの兵三人で市内電車を利用  
し、あとは徒歩で背負って病人を入院させました。し  
かし、十時ごろに急性肺炎のために急逝しました。

この兵隊は新潟県岩船郡朝日村出身で、翌年の二月  
に二十歳の夫人が女子を出産されたとのことでした。  
私が復員した際に、台湾南部の山峡の道路上で新兵時  
代の中隊長殿と対向乗馬の姿ですれ違いました。そこ  
で動員で転属後の経過を報告しますと、中隊長は「若  
くして国のために殉死した家族に対しては、戦友とし  
て最期を看取った者は必ず遠路でも時間と旅費を作り  
慰問をせよ」と命ぜられました。このことは訪問を  
した結果後で分かったことです。

十二月八日夜になり、「九日の正午ごろまでに再度  
釜山鎮埠頭にて乗船準備を完了すべし」との命令が届  
き、九日早朝から移動を行い、今度は臨時に羅南所在  
の歩兵第七十六連隊の第三大隊（虎八五〇六部隊）奥  
田大隊の指揮下に入り、機関銃中隊の兵員の協力を得  
て、無事に日没までに兵馬共に「メルボルン丸」に乗

船を完了しました。

翌日早朝、釜山港を出港をして、夕方に日本式の建造物の見える港外に停泊しますと、下船する部隊と反対に乗船する部隊があり、十一日早朝船が出港し、昨日乗船した兵隊から話を聞きました。何と門司港外であり、小倉の兵器廠から車両と弾薬等を搭載したとのこと。内地の状況を聞く時間もなく別れました。

輸送船内では極端に水の使用制限がされておりました。馬一頭に一日約三十五リットルの水を飲ませなければ馬は消化不良にて腹痛を起こします。船底の貯水槽から手押ポンプにて水を汲み上げます。一般の兵隊が水をくれと申されましたが生水を飲むと下痢を起こすから飲めないと注意を与えて少しずつ分け与えました。

船は十二月二十四日に厦門港外に停泊して、船団が九隻になり、前後左右の護衛の海軍艦艇も九隻となりました。太陽の位置を見て、これは南方方面に行くのであろうかと思いましたが、真相は分かりませんでした。

た。

船は台湾の馬公に仮泊をしました時、輸送指揮官から正式な通達がありました。「本船団はフィリピンの北サンフェルナンド港に向けて出発をするが、これより米潜水艦の待機する海域に入る。各員は上甲板に出て潜水艦の潜望鏡らしき物体を発見しなければならぬ」さらに「英語とスペイン語の会話と翻訳の出来る者は上申書を作成して申告をするように」との命令が発表されました。

私は何か嬉しくもあり、心配も出て参りましたが、現状のままの馬卒でいるよりも通訳を志願してみました。くなり、早速に申告書と学歴書等を提出しました。さっそく第七十六連隊の大隊副官から呼び出しがあり、本部に出頭しますと「ただの一等兵でいて、なんで幹候試験を受験をしなかったのか」との質問を受けました。私は身長が一五四センチで体重は五十三キロでしたので「一生兵隊の階級にて召集解除を受ける予定でした」と上申致しますと、「船長室に一緒に来い」と言われて船長室に入りました。

そこには海軍大佐がおり、何も言わぬのに最初からスペイン語で「ご苦勞、俺と一緒にスペイン語と英語を交せて話をしようではないか」と申されました。それで私は初めは英語にて自分の出生地の説明をし、後に学校とイングリッシュスクールで学んだスペイン語と北京語の三カ国語で答えますと大変に喜ばれて「ただの一等兵では困るな」と申されました。

翌日、台湾南部の高雄港に入って二日間停泊し、飲料水の補給と関係する隊員の乗下船があり、十二月三十一日朝、バシー海峡に向け出港しました。一月二日の午後に一隻の船が魚雷で沈没をしました。その余波で本船も大きな波を受け全船が逆方向に反転し、一月五日の早朝には再度高雄に入港を致しました。

指揮官より「全員夜中に本船から下船をして、大至急に岸壁から離れ、指示を受けた地点まで行くこと」との命令が出て、夜中から明け方までに下船を終了しました。明るくなって付近が良く見渡せるようになり、岸壁に建つ砂糖倉庫が爆撃のため焼け、砂糖が黒

こげになっていゝ様子を見ました。これは早く馬を疎開させないと上空から丸見えとなると感じ、道路に陸橋が見えたので一人で二頭ずつ引いてガード下に運び始めました。

と、午前七時頃、P38の空襲と銃撃により二頭が被弾、さらに昭和十九年九月六日に入隊した教育召集兵が一人、肩先に銃撃を受け重傷となりました。

通りがけた水牛の荷車の台湾人に十円札を渡して「忙しいところ相済まないが、重傷者なので低速でも良いから医者まで乗せてくれ」と頼みますと、言葉は良く話せませんでした。現況を見て手招きで乗れと示しましたので、空襲の中、地理不安内の高雄市内に向かつて歩き出しました。すると大きな川を渡り終わりますと、左側にアイボリー色の建造物があり、正門らしき場所に立哨中の衛兵がいました。そこで私は「今しがた高雄港に上陸した通過部隊であります、見たとおり銃撃により肩に重傷を負った兵がいるので軍医さんはおりませんか」と聞きました。歩哨は衛兵所に向かつて大声で衛兵司令を呼んでくれました。

司令が門前まで急いで出て来て負傷兵の姿を見ますと「軍医殿がおられるから大至急連絡をするから、兵を門外の日陰に寝かせて待つておれ」と申しました。四、五分ぐらいして二人の衛生兵が担架を持って走つて来てくれました。

その間に私たちの部隊兵と所属大隊名を入門者届文書に記入しました。「早く医務室に同行せよ」と申されましたので、衛生兵の後ろを歩き医務室に行きますと軍医殿が待つており、治療台の上に負傷兵を寝かせ、皆で上衣を脱がせました。傷口を衛生兵が脱脂綿で拭きますと二十ミリの弾が左肩の後部から食い込んでおり、軍医殿は「麻酔は手術の後に痛み止めとして使うが、現在一時も早く銃弾を抜いて傷口が化膿せぬように治療を行う」と申して、すぐにも手術を始めました。

私は軍医殿にお礼を申し上げて「私たちは後に岸壁の広場に兵員と馬が残っておりますので、一刻も早く安全なる場所に移動させなければなりません。手術等は全て御一任を申し上げますので、私は岸壁に戻りた

い」と申し出しますと、軍医殿は「傷口の痛みが取れらば正式に高雄市の陸軍病院に転院させる予定である。余病が出なければ治るであろう」と申されまして、私は途中の近道を教えていただき、岸壁に戻りました。

馬は三十頭ほど残されており、再度私は一人で三頭の馬を連れて、全兵員と全馬の移動を指示しました。林後官の竹やぶの中に馬の移動を終了した時は、もう午後三時を過ぎており、三人の新兵に馬の監視を頼みました。そして指定を受けた建物の小学校の外で、皆疲れ切った顔で足を投げ出し休憩をしておりました。

九月六日に入隊した教育召集兵が「初年兵が病氣らしく座り込んだまま動けない様子です」と申しました。私は「森本軍曹殿はどうした」と尋ねますと、「大隊本部に食糧と馬糧の分配をしてもらうため行かれました」とのことなので、「それでは本部の所在地はどこか」と聞いて再度裸馬に乗り走りました。

大隊本部も現地に到着をしたばかりでしたが、無理

にでも軍医殿に往診をお願い申し上げますと、軍医殿も衛生兵を従えて同行してくれました。早速診察をしてくれましたが一言「早く陸軍病院に入院をする手続きと文書を作成をするから再度本部に同行せよ」と申されまして、病人に対しては応急の注射と安定剤のよくな薬を飲ませました。

本部に行き、輜重兵用の車両を借用して戻り、馬糧用の吠かまきを車両上に重ねて病兵を横向きに寝かせて、高雄の陸軍病院に向かいました。

陸軍病院は山の近くにあり、一時間ぐらいかかって病院に到着しました。病院に病兵と軍医殿の添状を提出し、早速診察室にて病状の診察をしていただきました。衛生下士官殿が小生を廊下に呼び出しまして、部隊状況と病兵の日常を聞かれましたので、「十一月二十三日から一月五日まで四十四日間は不眠不休であり、入浴も第七十三連隊の最後の晩餐会の後に入ったきりで、その間三十五日間入浴すらできず、軍服や軍靴を脱いだ時間も無くて、全員シラミだらけです」と答えますと、「高雄市は冬でも暑いので、明日から全

員衣類を熱湯で煮てシラミを退治せよ」と教えてくれました。

下士官は「君は疲れておるけれども今夜は病人に付き添うように」と私に申し付けられました。

衛生兵と共に病院に残り待機しておりますと、午後九時頃に「軍医殿より病室に入れ」とお言葉があり、入室しますと病人は安らかに他界をしております。

私はこの兵は三カ月の教育召集兵で、予定では十一月三十日付にて除隊をする予定でした。突然の動員のために臨時召集に切り替えをされて、現在まで毎日の訓練と移動により疲れ切って身体の力を燃え尽くして殉職されました。「本人も御家族も大きな犠牲です」と申されました。

兵の遺体は病院に一任し、死亡診断書を受領して、空の輜重車を重い足取りで引いて本部に帰着、報告を完了しました。その後、自分たちの割当てられた宿舎に戻りますと校舎はシラミだらけでしたので、全員校舎に入らずに野宿をしておりました。

翌日に部落の台湾人の若者は日本語が分かると聞き  
ましたので、少々お金を包み、「衣類の消毒をしたい  
のでドラム缶が手に入れないか」と尋ねますと「近  
くに精糖会社の社宅があるから場所を教えましょう」  
と言われました。同年兵三人と早速その社宅へ行きま  
すと空襲のために多数疎開をされており、空家が多  
数ありました。小さな池の近くに住人がおり、現在の状  
況を申し上げますと「交代で全員衣類の煮沸と入浴も  
出来るように致します」との親切な協力をいただき、  
早速お世話になりました。

何と不思議なる縁ですか、私の父の妹が渋谷区で質  
店を開いておりまして、そこから結婚をされて現在の  
社宅に居住されておるとのこと。昭和十年ごろ叔母さ  
んの家に夏休みに遊びに行き、玉川上水で魚採りをし  
た話や付近の情景を語り合い、一日で懇意になり、大  
変お世話になりました。そして全員さっぱりとして元  
気な兵隊に戻ることが出来ました。毎日の野宿にも工  
夫が施され雨天も凌ぐことが出来るようになりまし  
た。

やがて一月九日、大空襲の後に第三挺団が高雄に上  
陸して、第十九師団の会寧に所在する歩兵第七十五連  
隊（虎八五〇五部隊）の第三大隊が三塊蓄という町に  
建てた旭国民学校内に仮駐屯しており、この大隊は馬  
と車両は連隊本部の乗船をする船に積み込んだので、  
馬取扱兵と馬のみがないので、ちょうど機会が良い  
ので第七十六連隊と話し合いされたらしく第七十五連  
隊から正式なる命令文書が届き、私たちは正式に第七  
十三連隊から第七十五連隊に転属と決まりました。

一月十五日、旭国民学校の第三大隊本部にて転属の  
申告を行いました。何としたことか私は機関銃中隊  
第一小隊に編入されました。

この機関銃中隊に配属とは名目上で、馬を管理する  
兵は私たちの任務ですので、相変わらず馬の世話や馬  
体の手入れと、五十三日間にわたる肉体的な休養を  
図る目的で、馬撃場にて五カ月ほど自由な生活を行いま  
した。

馬の爪が六十日間も正式なる演習に使用しなかつた

ので伸び過ぎて蹄鉄の上から被さるようになり、爪が割れるので、獣医部の下士官に点検を受けた結果、第七十六連隊と合同で、二日限りで全馬の装備を終了をし、見違えるほどに馬が立派になりました。

その後、日中は空襲を受け大変危険な情勢となり、さらに第十九師団の各部隊もルソン島に向けて出発するも船便がなくて、やむを得ずに上層部が協議の結果、第十方面軍（台湾軍）の指揮下に編入となり、改めて独立混成第一〇三旅団（通称破竹旅団）と称し、台湾海域付近に陣地を構築して防衛の任務にあたることになりました。

昭和二十年二月六日夜、高雄市を出発して五泊六日で台南州の北港街と称する町まで夜のみ行軍を行い、日中は林の中で仮眠を続けました。小生は第七十五連隊の第九連隊指揮班の行季を騎馬に積載して行軍し、四日目くらいから歩兵部隊の兵員が落伍を始めました。道路が平坦ですので馬が楽に歩けるので、へばった兵員を輜重車の荷物の上に寝かせて多数運びましたら、後日中隊長殿よりお礼の言葉を賜りました。

六日間かけて到着した地点は、海より山が遠いので陣地構築は不可能となり、改めて三日ほど後に戻り、高雄岡山御本部の大岡山と小崗山の山麓に陣地の構築を開始いたしました。そこは四百メートルほどの小崗山の西面海軍航空部隊の軍需物資の倉庫として山中をトンネルで数カ所も抜いており、さらに六百メートルくらいの頂上には電波探知所が設置してありました。その兩山の麓に、歩兵三個大隊二千七百人くらいが海岸線に向けて陣地を造り始めますと、海軍の大鷲部隊は大喜びで「海軍物資は他力により保護を受けられる」と申していつの間にか交流が始まり、三月初旬に大隊本部から私に対して「電探に協力を行い、暗号電文の解説のために海軍に出向せよ」と命令を受けました。

五月中旬まで電探に勤務いたしました。米軍と中国本土および台湾人の中にスパイがおり、時折冬山の頂上付近から、懐中電灯のようなもので連絡をしている光景を望遠することがありました。沖縄の戦闘が開始されて一カ月、四月初旬に台湾の東方海上を大機動隊

が北航中の無電連絡が解説出来まして、大鷲部隊は「海軍艦艇団に連絡が入り、南大東島付近にて空母と巡洋艦を沈めることが出来た」と申されて、小生は大隊長殿から改めて「善行賞」の授与を受けました。

五月下旬となり、台北州の淡水河の河口右岸上の淡水ゴルフ場の二キロほど山中に入った場所に移動を命ぜられました。これは沖繩に増援部隊として派遣されるのではないかと感じましたが、その地点は台湾の最北端に位置して防衛上の陣地としては重要な位置でした。

私たちの大隊本部を設置した山頂五百メートルくらいの所にもやはり電探があり、私は電探要員として派遣をされ、さらに八月十二日に台北市の南部を流れる新店溪という川の付近の草原に、誠部隊と称する陸軍の飛行場大隊へ派遣の命令を受けて、各地点を点検中の八月十五日正午、大隊本部に全員集合の命令を受けました。

ラジオ放送を聞いたところ無条件降伏との内容で、

残念であると悔しがっておりました。しかし命令が出るまでは落ち着いた行動をしなければと心に決めておりました。夜になりますと台北市内に花火と爆竹の音が聞こえました。後日人の話によりますと、台湾人は植民地ではなく、中国人として台湾の主であると申しておったそうです。

やがて八月十三日、私は元の歩兵第七十五連隊に原隊復帰を命ぜられまして、歩いて台北駅まで行く途中、台湾人が私の氏名を見て「これから台湾人の社会が来る」と申して喜んでおりましたので、私は「おめでとう。真実は台湾の植民地ではなくて、独立だけではやがて上陸して来る蒋介石の部下の人々を台湾人の税金で養わなければならなくなるでしょう」と申し、さらに「日本人が帰国をした後は、現在日本人の建物または鉄道や全部の公共物の持ち主は、台湾人ではなくて蒋介石一派国民党の天下となる、分かりますか」と申しますと、彼は驚いて「台湾人が自分で決めることは出来ないのか」と申して顔色を悪くしております

した。

そして大隊本部に帰任の申告を致しておりますと、第十九師団は朝鮮人の特別志願兵を昭和十三年度から募集して、昭和十九年度からは徴兵制となりましたので約二割くらいは朝鮮人でした。独立国人として大隊本部から新品の軍服と七日分の食糧と三ヵ月分の給料を引き渡し、本部から分かれて出て行きました。

私が九月十三日から正式なる通訳として、一等兵の階級章を付けたまま台北市内の日本軍司令部に出頭いたしましたら「高雄の要塞司令部に向せよ」と命令を受けて台北駅前に行きますと、元の朝鮮人の部隊が朝鮮国旗を持って行進を行っており、彼らは「台北駅から基隆駅まで行くのだ」と申しており、別れを惜しみませんでした。

九月十四日から高雄市で、上陸をして参りました中国軍に対し、日本への引揚者と軍人が無事に何の支障もなく復員出来たのは人見閣下の人格のお陰です。十月に上陸をして参りました米軍との交渉も円満に進行

をいたし、日本人は個人的には体で背負い、または手荷物として持てるだけ持ち出してよろしいと寛大なる取り扱いを受け、乗船に際しての岸壁広場での荷物の検査も、米軍も中国軍も荷物の前を通り過ぎるのみで品物の中身を手に取って見る事はありませんでした。特に婦女子に対しては紳士的な取り扱いを受けました。

台湾人の中には「寂しくなる」と申す人物もおりましたが、一部では日本人が家を離れる時を待って、金槌や金槌子を用いて建造物を手当たり次第に剝ぎ取り、水牛車に積み込む者や、手や天秤棒にバイスケ（竹かご）を持って担げるだけ持って行く台湾人がおりました。私はこの光景を見まして、これは日本人の責任であると感じました。差別した結果であると、自分なりの判断をいたしました。

昭和二十一年三月十五日となり、私たちも米軍から借用して日本人の船員さんが随行をするリバティ型の二〇五七号の船内勤務の命令によって一日早く乗船を

行い、乗船者の船室と貨物ハッチの分類をし、十六日に乗船となり出発しました。

三月二十日広島県大竹港に接岸し、また一日遅くなりましたが船内を清掃して、翌二十一日の夕刻に上陸をしました。夜十時頃になり関東および東北方面への帰郷者は、二十二日午前七時、大竹駅を出発する復員列車に乗車すること、そこでは曹長以下に対して金二百円が支給されました。また、帰郷をして定住の家が決まるまでの無賃乗車証が渡されまして、嬉しさのあまり二十一日の夜は久しぶりにて元海兵団の入浴場で海外での二年間の汚れを洗い流し、朝を待ち、午前五時起床、朝食後、大隊長殿から最後の惜別のご挨拶を受け、重い荷物を背負って大竹駅から東京行の列車に乗車しました。

列車が走り出して右に海、左に山等を眺めて中国の曹時代の詩人杜甫作の「國破山河在」「城春草木深」ではないかと、戦友に語り掛けますと「まさにそのとおりだ」と申しているうちに広島市に入り、灰煙と化した市内が目に入り、話に聞いた以上に惨たんたるあ

りさまを目にしました。そして東京地方はどのようなか案じる気持ちになりました。

やがて広島駅に列車が到着をいたしますと一般の乗客がホームに二列に並んでおり、私たちの復員列車を見て駅員さんに何やら話をしておりました。駅員さんが一般乗客は乗れませんと言ったらしいので、同じ列車に乗り合わせており、群馬県に帰郷される機関銃隊の中隊長殿は、「我々は国家の税金で乗車をしており、無賃乗車であるのに、料金を支払った人が乗れないことは軍人として申し訳が立たぬ」と兵隊達は全員席を譲り、乗客に乗車をしてもらおうと申し入れを行いました。

そして一般乗客の皆さんは喜んで乗車をされました。東京駅着までの間の各駅で乗下車する乗客は、皆さん大変に喜んでおられました。私が座席を譲った五十年配の婦人は、東京日本橋の芳町の旅館の女将でして「故郷に行った帰りだ」と申しておりましたので私の故郷の「赤坂見附は焼けましたか」と尋ねますと「残念ですが焼けました。お気の毒ですね」と申され

ました。私は「いやいやそれは違います。僕は一番幸福者です。ご覧ください、このとおり体が健康です。また元気で働けば家も品物も手に入りますが、不幸にして戦死をされた本人も、ご家族の方々は一番気の毒ですよ」と話をいたしますと「まさにそのとおりですね」と喜んでくれました。人生の巡り合いほど不思議なものはありません。東京の人形町の永井印刷所の主人は、私の元の中隊長殿の家であり、話をいたしますと、婦人は「近所ですので奥さんとは良く顔見知りです」と申しておりました。

昭和二十三年午前七時三十分ころ、丸二年一カ月ぶりで東京駅に帰着をいたしました。そして各所を尋ねて家族と面会を致し、皆も元気で再出発を誓い合い、現在では三人娘と二人の孫達も成人をして、私も七十歳九カ月で、まだ元気で葛飾区のシルバー人材センターにおいて端役を務めております。家族全員元気で幸福です。

## 朝鮮歩兵

### 第四十九連隊補充隊

### 歩兵二十三部隊勤務歴

福岡県 上津原 猛

八十六歳を迎えた今になり、五十数年前になる私の二十七歳から三十歳までの軍隊生活を書きます。

昭和十（一九三五）年十二月一日、当時の徴兵検査の結果、私は背丈、体重が足りないことが大きな理由と思われる丙種で、国民兵役となっていた。

その後、日本は支那事変、大東亞戦争と戦局を広げていった。そんなある日、私は理髪店で散髪中、国民兵役の者も近々召集するというラジオのニュースを聞いて、戦局のただならないことを知ったのである。

昭和十七年十一月某日、私へ赤紙の召集令状が届いた。これは国民兵役召集の第一回目らしいことを知った。人選がどのようにして決定されるのか知らない